

家のたなほり  
下





















いづれに用ひぬ者ぞと物も色もはらへり  
余程もつらやといふまじしとて言ふこと  
後家におもひたれりる折もく先をたてりてを  
おくれ能くもあらんやうはふはくはらへり  
里と考へてつらあらも用事多しとのと  
言つ又とらつくと寝入るるを梅之患を言  
等とつとよめてとて居るりしうぬくと心付  
三里の宛へ計おほきとて後家へ向白川夜舟  
明渡し簪の方と男の並実出しく五里を  
先く麻く居るハ男程もうさつ先づ指

七

子成りたる中と膝の上と居るふあはぬ折  
まう候へ 上げ方とよとやうかんとての世を  
よまらむとて小腹の邊よりとらまきこのうは  
らとあてて見ればはなはぬ色の上にて居ると  
折も憶ふあらうとた服穿つてはいて居るう  
しつとあまをひと向自あくむとて死くハ人実を  
経止てまきと三里のつらまきと折こまきりあまが  
宗家坊くう程力近くとまきあてと引くまき  
入折くうと折くはらうとらとて男折風逆岸  
怪怖甚方筋骨はらいて不自由をまきとまき





おまへおし是切と思ふ切てまぬ心切く  
よれ事らととれとていれ思ふ可く  
おとろいふの事言立にわたりて  
も風物引置れあうまぬ之梅と  
小波流れて唯くがの辰ゆり  
去ると思ひ切とわぬもあ  
まわく流れぬあうゆり小  
と流るえやまをく驚く  
二度のあわくまひと  
うまうくはまもあ  
改むは輝る

ふりてとて思ふ事もな  
静と居るもの事  
まひを動かすの罪の  
ゆゑよひぬ其の言葉と  
いつ比思ふ世の中  
まよふ自害しり  
流るく是の程守  
しつとわ公切  
二度のあわくまひと  
其後の二度で

一入古く通ひ流るる近付るべくも深利  
 もつる里も後新尚大に後立し今まも  
 生外来く心も色しちことつてあまの群衆の  
 皆梅之悪くも里に於くと大の怒と仰りあまの  
 心なしく一通り拂し一箇淫樂をさすち返す  
 かしれあまの便りも新波のつらさなり大  
 坂さうしてあまの茶

